

ラジオの効用



この二十年間、ラジオとは殆ど縁がなかった。全くなかったという訳でもない。車の中ではいつもかけているし、目覚ましも6時にセットしてある。ジジカセが自動的に鳴って、そのニュースが一日の始まりという事になっている。しかしどちらにも集中して聞いているというより耳に入ってくる程度のことが多く、情報は殆どテレビから得ている。朝のニュースにしてから、目が覚めればテレビに切り換えてしまふ。そして日中はテレビを点けっぱなしで、台所仕事はちらちら見ながら、用事が終われば前に座ったりと、毎日殆ど固定した番組を見て過ごしていた。

ところが以前にも書いたように、昨秋から「おまんじゅつ」を作らねばならない羽目になった。大し

た数は作れないが、一応毎日作っている。それが素人の特製まんじゅつのこと、五十個作るのに一人で五時間かかるというしろものだから、作業場にいる時間が結構長い。イベントなどで特注があったりするとともうそれに一日がかりつきりになる。そうなる現代人とはおかしなもので、手だけを動かしているのは何か物足りないのだ。そこでラジオが登場する。

息子がくれたラジカセを夫が流しの上の棚に置いたが、私には高すぎてやっと点けたり消したりが出来るだけなので、セットされたNHKばかり聞くことになる。しかしラジオというものが中々の情報伝達の機関であることを再認識させられている。

耳学問というべきが、園芸や医療などについても教わることが多い。「私の本棚」も健在で、エッセイを楽しむことも出来る。音楽も湯川れい子さんなどの解説が入ると、結構ポップスやジャズなどの知識が増えてくる。特に民謡の担当の竹内何とかさんというのは驚くほど詳しい。贅女の俗謡や、津軽三

味線など古い貴重な録音を聞かせてくれて、聞き比べさせて解説してくれるので納得出来るしその豊富な知識に敬服するばかりである。先日は安来節で、その変遷も面白かった。

そしてこれも驚くことに、受信者とのコミュニケーションがテレビよりずっと深いのである。電話相談などもそうだが、この頃普及しているFAXを利用しているものが多い。殆ど対話と言えるほどに素早く同へFAXが入って来て、聞いていると未だにラジオ党が多く健在であることを実感させられる。

ただ実況放送はテレビには敵わない。国会中継などはまあいいとしても、相撲などスピードのあるものはアナウンサーも困るだろうこれは負けたと思う力士が「勝ちました」などと言われたりすると、やはり言葉の説明の限界を感じる。大体新しく幕に入った人の顔がさっぱり見えない。千代大海なんてどんな力士だろう。まだ三場所ほどしか経過していないのに新旧の浮沈は激しい。そういえば小錦の引退もあつたっけ。

電話相談では、育児や医療、園芸などに応じている。赤ちゃんや学童の問題などを聞いていると、現代の母親の姿が見えてくるような気がする。私たちの頃は、親や友人たちとの会話で自然に得ていたような育児知識もなければ、しっかりと自分で考えて行動する事もしていない。ひとりぼっちの母親も気の毒な気もするが、安易に人に頼らず自分なりに試行錯誤することも必要なんだと思う。

夕食後はまたテレビに戻ってしまつが、仕事をしながら聞けるラジオの効用を見直しているこの頃である。

